

生徒意見例Ⅰ（「靴の話」）

例えば、「靴の話」で語られている話。この話が、次のような情報として伝えられたらどのような印象をもつだろうか。

比島における日本軍の物資の欠乏は筆舌に尽くしがたいものであった。靴は鮫皮製のものしかなく、しかもその数は兵士の数を遙かに下回るものだった。

「情報」は「情報」であって、「知識」として蓄積されることはあっても、その事実の裏側にあつたであろう「苦しさ」や「痛み」を本質的に共有することはできないと思われる。

しかし、それが「靴の話」という文学作品に昇華され、例えば、「靴だけが『事実』である」「死んだ僚友を思い出させる鮫皮の靴を履いているのが重荷になってきた」等の言葉を通じて伝えられることによって、受け止める側の想像力は喚起され、はじめて当事者の抱える「苦しさ」や「痛み」を感得することができるようになるのではないか。

小川さんの主張は、歴史的事象に関わる知識や情報を詳細に得ることができたとしても、他者の「記憶」をそのまま自分自身（自己）が共有することは不可能であって、そこでは本質的な「共感」は生じ得ない。だからこそ、「文学」の言葉が必要なのだということではないか。「理屈から自由になり、矛盾を受け止める必要に迫られた時」に「文学の言葉を借りてようやく、名前も知らない誰かの痛みに共感できる。あるいは、取り返しのつかない過ちを犯してしまう人間の、愚かさの影が、自らの内にも潜んでいないか、じっと目を凝らすことができ」という主張は明解であり、私の心を打つものであった。

生徒意見見例2（「夏の花」）

小川洋子さんの「死者の声を呼ぶ小舟」の中に「他人の記憶を共有するなど、全く非論理的な足掻きだ」という強い言葉があつて強い衝撃を受けたが、その意味を落ち着いて考えてみたい。

「夏の花」は一九四五年八月六日の朝から数日の間に起きたできごとが、精緻に綴られた作品である。この作品は原民喜の「原爆被災時のノート」を基本的な素材として書かれたことを授業で知りましたが、彼は「夏の花」を創作していく過程で表現を極限まで精査したのであらうと思われれます。

文芸評論家の佐々木基一氏が、「夏の花」について「凄惨な光景にもかかわらず、それを見る作者の眼は澄みきっていて、そのためそこには、どこにもあくどい描写や感傷的な誇張がみられない。一つ一つの言葉と文章のすべてが、正確無比で鉱物資の物質のようなピカピカした光を放っている」（岩波文庫版『小説集夏の花』解説）と評していますが、まさにそのとおりで、作者が衝撃を受けた事象については、反復・換言・比喻などの技巧が駆使され重厚に書きこまれています。

例えば、「突然、私の頭上に一撃が加えられ、目の前に暗闇がすべり落ちた。」という被爆直後の描写には「うわあ」という叫びの言葉が三回出てきますが、どれも同じ時点で発した叫びであることは明らかであり、作者が被爆直後の衝撃的な事態を三通りに重ねて描写していることがわかります。

こうしたこともあって「夏の花」が読者の想像を喚起する力は強大なものになっていると思うのですが、この喚起力こそが小川さんの言う「記憶の継承」のために求められる「文学の力」なのではないでしょうか。